

サ系ハンサ像が入っていた可能性が考えられる。

仏教では、ゴータマブツダが前世で功德を積まれたという本生譚（ほんじょうたん、ジャータカ物語）の中にも、賢いハンサの王（ハンサラージャ、鷺王、雁王、ヒンダーミン）が鳥たちを導く話があり、ミャンマーの漫画本にも出てくる。



分からないのは、ヒンダーとカラウェイの図像的区別だ。カンドーギー湖とチーミンダインの例で見れば、カラウェイの首筋は獅子のたてがみのように段になって落るのに対して、ヒンダーの首筋の羽毛は、尾羽とともに炎形に立ち上がる。

ところが、ヤンゴン市中央部のチャウタッジー寺の涅槃仏の足の裏にある 108 の図像ではこれが逆になっている。さらにややこしいことに、Ruddy Goose と英訳された鳥（ビルマ語名 Sekkawet、足裏図ではペリカン）も加わっている。パーリー語辞典では Cakkavako（英名 Ruddy goose, 学名 *Anas casarca*）と書かれていて、調べれば調べるほどこんがらがってくる。

ちなみに仏足の 108 図像中の席次では、74 番ヒンダー、82 番カラウェイ、85 番セッカウエツの順となる。鳥の眷属で 64 番ガルダは、ヒンドゥー教のビシュヌ神の乗り物である。

仏像が作られるようになったのは、ブツダが亡くなって 500 年余り後のことで、超人的なイメージとして三十二相が編み出された。我が国の仏像でよく知られる、頭のとっぺんの肉けいや螺髪、眉間の白毫などがそれである。手足の指の間には「水かきのような膜」があることになっていて、鷺王ヒンダーミンはその点でブツダになることが約束されていた。またその渡りの性質が、肉体に縛られない精神の象徴ともされ、とくべつ崇められたようである。

とほき世のかりようびんがのわたくし児 田螺^{たにし}はぬるきみづ恋ひにけり

斎藤茂吉の幻想的な歌が短歌界に衝撃を与えたのは、もう 100 年も前のことになる。畦^{あぜ}に近くぬるんだ水の中で、タニシが触覚をゆるゆる動かしている姿に、舞楽「迦陵頻」を連想したのか、それとも子供のころ蔵王の麓の寺で耳にした法話に、なにかそのような不思議な話があったのか。

タニシを肴に、ミャンマービールを飲ませる店はないだろうか。